

記念講演

グローバル化と 日本の教育

講師

国際教養大学理事長・学長

中嶋 嶺雄 先生

はじめに

松本は私が生まれ育った所ですので、今日こうして皆さま方にお迎えいただいたことを大変光栄に存じております。私はロータリアンとしてはまだ新米ですが、ロータリーには非常に長い間お世話になっております。まず私の東京外国語大学の時代の教え子で現在同校で私の後任になっている国際関係論の教授は、ロータリーの奨学金でカルフォルニア大学バークレー校に留学し、Ph.D.を取ってまいりました。当時はまだ奨学金が非常に貴重で、大変ありがたいことだと思って感謝しております。もう1つは米山奨学財団の奨学金ですが、信州大学の方々、あるいは松本で学んでいる留学生の方々など米山奨学金が非常に役に立っております。私どもの大学でも留学生のための奨学金として非常に注目させていただいております。講演のテーマとも関係すると思いますが、我が国は2020年までに留学生30万人計画などを試みようという計画を立てているのですが、政治的スローガンとしてはともかく実際に奨学生を受け入れる場

前提としてグローバル化の意味と国際化の意味を きちんと区別して理解することが必要。

合の宿舍や奨学金の制度などまだまだ非常に不備です。そういう中でロータリーの国際貢献という意味でも非常にありがたいことだと思っております。

グローバル化とは何か

さて、「グローバル化と日本の教育」ですが、グローバル化とは何か、それはいったい従来言われていた国際化とはどう違うのかということからお話しさせていただきたいと思います。最近では本当にグローバル化という言葉が一般的になりました。それでは国際化はどうかといえますと、やはり私どもはグローバル化の意味と国際化の意味をきちんと区別して理解することがまず前提として必要ではないのか。グローバル化は英語ではグローバルイゼーション、地球化という意味です。電球の球もグローブということと同じように、世界が1つの球体になったという意味なのです。国際化の方は国と国との水平的な関係で、必ずしも立体的な関係ではない。日本とアメリカとの関係や日本と中国との関係、国と国との関係であり、英語ではインターナショナルイゼーション、インターナショナルですね。

ナショナルは元々ネーションを基礎とする言葉ですから、ネーションあるいは国のもう1つの呼び方は国家という場合にステートという言い方もありますし、カンントリーという言い方もあります。皆それぞれ英語でも日本語でもニュアンスが違いますが、例えばステートと言った場合には非常に国家の枠組みというものが前面に出る概念です。これに対しメニカントリーズ(多くの国々)という時は、もう少し素朴なというか、ちょうどゴルフのカントリークラブと同じように、いわば地域性を表しています。それからネーションと言った場合にはそこに住む人間を意味していると思うのです。日本語で書いても国という言葉は普通に国家の国という言葉もあれば、邦人というときの邦もあります。また土という字を「くに」と呼ぶ場合もあり、これは故郷、郷土です。それらを含めて考えると我々は一般的に国際とかネーションと言っていますが、ネーションとネーションを繋ぐから国際、インターネーションなのです。それがインターナショナルという形容詞になり、さらに名詞になったのがインターナショナルイゼーションなのです。グロー

バル化というのは様々な国の違いを越えて地球全体を一体化させてしまうということだと思います。これを分かりやすくするために日本語ではグローバル化と言っていますが、中国語では「全球化(チョワンチュウホワ)」と言います。この方が意味が通じるかもしれません。まさに全球化の時代である。全球化というのはご承知のように、皆さん自身がそういう日常の中にもう生きているように、例えばインターネットでアクセスすれば時差を越えて世界が繋がり、地球の裏側であってもどこでもあつと言う間に情報が交錯する。これはいったいいつごろからこうなったのでしょうか。そしてまた今全世界に国境(ボーダー)はありますが、それがインターネットによりボーダーレスというか、国境が低くなっている。これはいつごろからでしょうか。実はこのグローバル化というのはまだ始まってようやく20年なのです。今2009年の秋ですが、1989年11月あのベルリンの壁の崩壊が起こって間もなく20年目になります。このベルリンの壁の崩壊というのは実は私が専門とする中国の悲劇と非常に関係があります。



20年前のベルリンの壁崩壊により 東西冷戦時代が終焉し、グローバル化が始まった。

中国で20年前に何が起こったか、6月4日の天安門事件です。この中国の悲劇を一番注目して見ていたのが当時の東欧諸国だったのです。なぜならば東欧諸国をおしなべてソ連が早くもペレストロイカを始め、グラスノスチというような情報公開を始め、ゴルバチョフというような従来のソ連にないようなリーダーが出てきたにも関わらず、ご承知のように東欧では依然として社会主義の独裁体制が続いていました。そして東欧の知識人たちは自分たちの国が天安門事件と同じような状況になりはしないかということを非常に懸念していたのです。私の実際の体験に照らしてそのことを少しお話してみたいと思います。天安門事件は人民解放軍が市民や人民に発砲し、戦車でひき殺すという大変な悲劇でありまして、皆さんもテレビの画面などを思い起こされることでしょう。しかしこの事件は単に中国だけでなく社会主義圏、特に東欧諸国にもものすごいインパクトを与えました。なぜなら中国の天安門事件が民主化要求に対する共産党のトップからの弾圧だったのです。東欧にはその独裁体制のもとで民主化

要求があちこちで起こっていたからで、その中の一番の典型が東独でした。東独にはフンボルト大学という、マルクスもそこに学び、教えたこともある非常に歴史の長い大変由緒ある大学があります。森鷗外も留学し、後に大学の一角に鷗外記念館が設けられています。その先生方から私に基調講演の依頼をされ、中国の状況をぜひ詳しく話してほしいというシンポジウムがありました。そのシンポジウムがあったもう1つの理由は既に東欧からは民主化を求める、特に後で分かったことなのですが、ベルリンの壁の東側では例えば聖トマス教会、これはバッハの埋葬されている所、そして聖ニコラス教会、いずれもライブツィヒにあります。こういう教会を中心として当時の東ドイツの独裁的な指導者ホーネッカーという大統領に対する民主化要求が起こり始めていました。そして既に難民が出始めていたのです。私はたまたまそれらの難民にもフンボルト大学に行く時に遭遇したわけですが、ベルリンの壁があるのでそこから西側に出ようとすればすぐに銃殺されます。従ってまずチェコに行き、チェコからオースト

リアに入り、それからオーストリアから西ドイツに入り西ベルリンに行っていました。ハンガリーも経由していました。こういう状況にありフンボルト大学の先生方も非常に熱心に、遠い中国のことなのに我が事のように真剣に議論していたのです。なぜならばフンボルト大学のすぐ近くにマルクス・エンゲルス広場というのがあり、そこが第2の天安門広場になりはしないかということを非常に懸念していたのです。同行した私のゼミの学生たちにとっては大変記念すべき旅行になりましたが、外国人の特権でシンポジウムが終わってから本当にものものしい警戒のあのベルリンの壁の東側で銃を構えている兵士たちを横目に見ながら外国人として壁を通して西ベルリンに来たのです。西ベルリン側の壁の方にはその犠牲者、壁を乗り越えようとして犠牲になった、亡くなった方に対する花輪がたくさん並んでいた現場を見ました。その直後にベルリンの壁が崩れていったのです。これはまだ20年前の11月、そして翌年から東欧諸国が社会主義を離脱した。中国との違いはホーネッカーが自ら退陣したことでした。



グローバル化が加速する中、 社会主義・共産主義国を含むアジアの今後は？

最後まで居座っていたルーマニアのチャウシェスクは非常に悲劇的な末路を遂げたことは皆さんご承知の通りです。ですからそういう大きな歴史のうねりの中でベルリンの壁が崩れた、これが決定的です。東西冷戦体制がそこで崩壊していったのです。

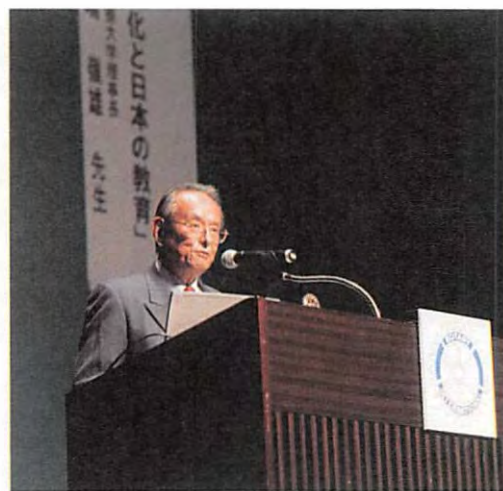
アジアの冷戦と 中国、北朝鮮

残念ながらまだアジアでは中国も北朝鮮も社会主義の一党独裁体制を堅持しています。最近中国の温家宝首相がピョンヤンを訪れて金正日氏と抱き合っている姿がテレビにも映されましたが、日本政府側が大きく誤っている1つの中国認識は、中国に対して柔らかく出れば、例えば中国が東シナ海のガス田とか、海軍力を増強して、この間も津軽海峡を通り、さらに沖縄から抜けて西太平洋の近海がもう中国の海になりつつあるにもかかわらず、あまりそのことは言わない。中国にできるだけ穏やかに出れば日本にとって懸案である北朝鮮を説得してくれるのではないかという、まさに6者協議の発想がそれなのです。私は何度か言ったり書いたりしているのですが、その発想が根本

的に間違えている。北朝鮮が崩壊して一番困るのは中国なのです。北朝鮮も崩壊すると言いながらなかなか崩壊しないのは、目に見えないところで中国がいろいろな支援をしているからです。従って表面的にはアメリカや日本と協調するためにいかにも中国が北朝鮮を抑え込んで説得しているかに見えるが、それは社会主義、共産主義の一党独裁体制同士の緊密な、まさに唇齒輔車と言われるような歯と唇のような基本的な関係があるということのを忘れてはならないと思うのです。しかも中国は相手の国が柔らかく出たからといって政策を変えるような体質ではないので、アジアにはまだまだもう少し社会主義、共産党の独裁体制が続くような気がします。というのは中国の例を取ってみてもなかなかそう簡単に崩壊しないような安全保障措置が徹底的に取られているのです。軍、オリンピックの時に見たような武装警察部隊、そして公安、この3重の抑圧体制と末端の町には報告制度というものがあります。皆さんが中国に行って誰か中国人の家に泊まることなんてほとんどできないでしょう。日本ならお

互いに家に来てもらったりすることができが、そういう状況の中ですぐに密告が行われるような世界なのです。そういうことを考えるとそう簡単に中国、北朝鮮が崩壊しないとすればそれこそがまた大問題であります。

さて、そういう状況の中でベルリンの壁が崩れていったことによってやがてソ連が崩壊しました。ものすごい重厚な軍事大国、それがあっという間にほとんど犠牲を伴わずに。ゴルバチョフ、エリツィンの間に若干の問題があったり、エリツィンが一時拘束されたりしたこともありましたが、そういう状況の中でもほとんど犠牲を払わずにあの巨大な軍事大国が崩壊していったのです。これはまた我々の同時代史のひとつまであります。



国際教養大学の理念と目標

☆理 念

グローバル化社会においては、多様な価値観や世界観を学び、諸問題の解決に努めながら、人類の未来を切り拓いていくことが求められるという認識の下、本学では、外国語の卓越したコミュニケーション能力と深く広い教養を身につけるための「国際教養 (International Liberal Arts)」という新しい教養理念を掲げています。

☆目 標

英語をはじめとする外国語の卓越したコミュニケーション能力と、豊かな教養、グローバルな知識を身に付けた実践力のある人材を育成し、国際社会と地域社会に貢献します。



そして私はその直後に、天安門事件のシンポジウムだったのですが、松本市と姉妹提携をしているアメリカのソルトレークシティの大学に招かれて行きました。シンポジウムが終わった夜、教授の家にお食事に招かれた時、「中嶋先生はどのぐらい論文を書いているのでしょうか、ちょっと見てみましょうか。」と言って彼はコンピュータでアクセスしたのです。私もけっこう英文の論文を書いていたからコンピュータの画面にミネオ・ナカジマという論文が英文でいっぱい出てきました。当時の日本ではまだそうになってなかったもので、どうやって私の書いた論文をコンピュータにアクセスしてそこに全部出てくるのか私はびっくりしました。これは今では当たり前のことで、世界の情報がコンピュータの中ですぐ手に入る。つまりIT革命が行われたわけであります。このIT革命、ちょうどそれも

1989年の体験ですから、ことは2009年、まだ20年前のことなのです。この20年間の歴史と社会の変化はものすごく大きいと思います。

おそらくグローバル化は皆さんも感じていらっしゃるようにいい側面だけではなく、マイナスもいろいろ入ってきます。病気の流行もそうです、SARSもそうでしたし、あるいは新型インフルエンザもそう言えるかもしれない。あるいはまた安い品物がどんどん入ってくる。身の周りにあるものを見ると大抵メイド・イン・チャイナと書いてあるんです。安かろう悪かろうでどんどん低賃金労働力でモノをつくって輸出していますから当然中国のGDPは膨らみ、外貨準備もたまります。それに外国投資も全部GDPになるので、日本もだいたい投資しているし台湾の企業やアメリカも投資している。それらが全部中国のGDPになるのですが、さて1人当たりの

高さはどうかというと、購買力平価で換算しても予見し得る将来、とても日本に追いつくはずはありません。つまり決定的な絶対値の違いがあるのです。しかしそういう状況の中で今申し上げたようにボーダーレスになりますから、情報や物、公共財、あるいは私の今日の講演はともかく、講演したもののなんかも誰かがブログなどに書き込めば全世界にすぐに広まるというような状況です。このインフォメーション・テクノロジー (IT) の大きな革命も不可逆的なのです。もう二度と元には戻らない。だとすればそういう中でグローバル化のマイナス面をいかに極小化するか、そしてグローバル化にどう対応するかということが今後の大問題であります。20年前はなかったことです。そして件の9.11がその間に起こります。まだ10年もたっていませんが、私も現場を見てまいりました。その9.11がこの20年間に起こったことによってもう1つ国際テロリズムというものに対するディフェンスが単なる安全保障の問題と違って大きな課題になったというのもこのグローバル化の1つの産物、あるいは副産物です。



グローバル化にどう対応するかという新しい知恵、
新しい考え方、新しい生き方というものが
当然生まれてこなければならない。

国際化とグローバル化

こういう状況を考えるといずれにしてもグローバル化というのはまだまだ始まったばかりで、そこにたくさん問題を含みながらも、それに対してどう対応するかという新しい知恵、新しい考え方、新しい生き方というものが当然生まれてこなければならない。それは同時に日本で言うと東京や首都圏だけではなく、この松本も長野県も当然のことながらそのグローバル化にいかに対応するかという問題に直面しているはず。しかしながらまだ日本はそのへんが非常に不十分なのです。後で紹介させていただく私の大学はまさにグローバル化に対応した大学なのですが、秋田県はこのところ教育が非常に評価が高く、3年連続で小中学校は学力テストで全国トップでした。しかし秋田自身のグローバル化が進んでいるかというそうではない。去年我々の大学で国際シンポジウムを開きました。アンドレ・マルローというド・ゴール時代の文化大臣だったあの有名な作家でもあり評論家でもあり、『人間の条件』や『王道』など小説も沢山書いて

いるマルローをめぐるシンポジウムでした。私もずいぶん若い頃から読みました。パリのオペラ座の天井の絵をシャガールに変えたのもマルローの意向でした。オペラ座は非常に古いパリの伝統的な芸術の殿堂なので、当時だいたい反対論があったのですが。そのマルローをめぐる国際シンポジウムを開くのでどうしてもフランス人のお客さんが多かったのです。ところが秋田に着いてユーロを日本円に替えようと思ったところ、普通アメリカなどに行くと空港の中には必ずキャッシングサービスのATMがありますから、4～5日、あるいは2～3日の若干の滞在だったらそこでキャッシングをしてマシンでお金が出てきますが、秋田には空港にも駅にもそれがないのです。みずほ銀行であればなんとかなると聞いたので、あるいは郵便局に行けばと言ったのですが、みずほ銀行に行ってもそれがうまく替えられない。結局2～3日我々が立て替えて済みましたが、松本は国際都市としてはどうなのでしょう。駅あたりに行くとユーロがパッとマシンで出てくるのかどうか、それが国際化です。国際化自身はまだ遅れ

ているところがありますが、私は前から松本は郷土のことを説明する標識が英語でも表示されていて、そしていろいろな観光ガイドは中国語、しかも大陸で使う簡便な中国簡体字と、台湾や香港などで使う繁体字が両方とも、あと韓国語でも出ているのは大変結構だと思います。そのように考えると松本は非常に可能性のあるところで、おそらくロータリーの皆さま方のご尽力があるのではないかと思います。

グローバル化と教育

さて、そのグローバル化にいかに対応するかというもう1つのテーマである日本教育に関連して考えてみたいと思います。日本の教育が果たしてこのグローバル化に対応するように体制を取っているだろうかと問うと、そこが全くできていない。我々日本の中教審や特に教育再生会議ではかなり突っ込んだ提案をしましたが大学や学校の現場がなかなかついてこない等いろいろな問題があり、このままいくと日本はアジアの教育先進国なんて思われていたところが、教育においても落ち込んでしまうのではないかという危機感を私はこの間



中学、高校、大学と習ってきた英語が使えない、 日本の英語教育を根本的に変えない限り グローバル化の時代に落ちこぼれになってしまう。

ずっと抱いてきました。例えば端的に英語教育ですが、今英語というのは国際語（インターナショナル・ランゲージ）ですから、その国際語というものを大学生がほとんどコミュニケーションのツールとして使えないまま卒業させているということは大変な問題です。アジアでも中国、台湾、韓国あたりは非常に英語教育に熱心になっていますし、この間はバンコクで言語と幼児教育について基調講演をしました。たまたまお隣がスズキ・メソッドの本拠地、才能教育会館ですが、私は才能教育研究会の会長として言語と幼児教育というテーマでお話をしました。バンコク、タイは本来タイ語という言語があるにもかかわらずいかに英語教育をこれから重要視するかということで真剣な議論が行われていました。日本も小学校英語の導入、5～6年生から週1時間というほんのわずかな時間やろうとしているのですが、果たしてその体制ができていくかどうか。本当はやるならもう少し早い年齢からやるべきだと思うのです。私自身は中央教育審議会の外国語部会の主査でしたから、ずいぶん強く主張したのですが、結局い

ろいろなことで妥協的に5～6年生から始めるということになりました。やはり幼児教育、言語、音楽。スズキ・メソッドはまさにそこをやっていきます。子どもたちは耳から聞いて覚える、暗記をするのです。初めから楽譜を読むのではなく耳から聞いて覚えるということは、私自身もそうですが子どもの頃に覚えた曲は今でも弾けるのです。それはもう血肉化しているからであり、そういう教育をすべきなのです。ところがどうしても文法とかスペルを考えているとすぐ会話ができません。外国語というのは基本的にはもちろん難しい英文学を訳したり読んだりすることも大事ですが、しかしなんといってもインターナショナル・ランゲージですから、中学、高校、大学と10年間習ってきた英語が使えない日本の英語教育を根本的に変えない限り日本はグローバル化の時代に落ちこぼれになってしまうのではないかと思います。そうかといって誤解を招くといけませんが、最終的には私どもは日本語というものを非常に重視しています。いかに日本語というものが美しい言葉であるかということも大切です。最近は日本語の能力も減っ

ていますが、例えば英語でジェスチャー、「身振り手振り」という美しい日本語を最近の若者は使わなくなっていました。ですから我々の大学では在学中の必読文献は新渡戸稲造の「武士道」です。それから留学中に読むべき学長の指定の本の中には斎藤茂吉の「万葉秀歌」、上下2冊の岩波新書があります。最近の若者は万葉集などほとんど読まないのです。少なくともあの名書ぐらいは読んで、つまり日本人としてのアイデンティティをきちんと確保していただかないと、単なる口先だけで英語ができるというのは全く意味がないのです。それはちょっと外国で育ったり子供の頃から外国に行けば誰でも流暢になるわけで、それを教育としてどう考えるかということは非常に重要な問題、課題だと思います。

さて、そこで教育と申し上げたのですが、どうも私が見ている限り文科省のお役人でも「教育」の語源を知らなかったのです。エデュケーション、これはラテン語から来ているのですが、東洋的、アジア的、日本的文脈では教育とは、「教えてこれを育つ」という『孟子』の中に出てきます。



知育、徳育、体育に加えて異文化理解。 自分たちの文化があって初めて異文化と言え、 単に外国に憧れるのは異文化理解ではない。

優秀な人材を教えてこれを育てる、これは大変な喜びだと。だから孟母三遷といわれるように母親も一生懸命教育に尽くしました。ところが教える方は教えるのですが、日本の教育は育てるということほとんど忘却しているのではないかと。ですから教えるだけでなく、いかに人材を育てるかということが教育のもう1つの大きな柱であるはずですが、教えることだけに学校教育の主眼があり過ぎたと思います。結果なかなか人材、人格を形成することができない。教育に関して文科省などが言っているのは、知育、徳育、体育で、この3つが教育の3要素だということを言っています。知育はナレッジ、知識、これが大事なことは言うまでもありません。それから徳育、これは道徳教育反対などだいぶ抵抗がありました。今回民主党によって参議院の輿石さんあたりの日教組出身の影響が出てくるのではないかとちょっと懸念しているのですが、今の文科大臣は割合に考え方が穏やかではないかと思っています。やはり徳育というのは非常に大事なのです。私が個人的にも親しくさせていただいている台湾の李登輝元総統です

が、この間も東京で大変素晴らしい講演をされました。『WILL』2009年11月号(2009年9月26日発売、発行／ワック株式会社)という雑誌に全文が出ております。私の解説も載っているのですけれども、李登輝さんは秋田に奥の細道の探訪の一環として来られて、「私の歩んだ道、日本の教育と台湾」という題で国際教養大学で特別講義をされました。日本が台湾で本当に教育を初めてきちんとやってくれた、台北高校(旧制高校)で学んだことがいかに彼の人格形成に役立っているか。それから台北帝国大学(現国立台湾大学)も、1928年に日本がつくっています。アフリカの植民地にイギリスはオックスフォードやケンブリッジと同じような大学をつくったのでしょうか、その点で台湾の人たちは日本に対する評価が非常に高いのです。ということを李登輝さんが話されると同時に、第1回後藤新平賞を頂いたので岩手県の水沢に行きました。たまたま小学校の集いがあったので李登輝さんはそこに行って、「君たちは後藤新平を知っているかね、彼はこの町で生まれた人だよ。台湾ではまちづくり、都市づ

くりを力を注ぎ、彼のおかげで台湾の近代化が行われたのだ。」ということをお小中学生に優しく語ったのです。その郷土の偉人を語るということもまさに徳育であり、そういうことをもう少しきちんと教育のなかに入れていかなければいけない。そしてもう1つは体育、これは体を鍛えるということで当然大事ですが、その知育、徳育、体育に加えて私は異文化理解、これは自分たちの文化があって初めて異文化なのです、単に外国のものに憧れるのは異文化理解ではない。英語では何というか難しいのですが、異文化はジ・アザー・カルチャー(the other culture)です。ジ・アザー・カルチャーという言葉はマイ・カルチャー、オウン・カルチャーがあって初めてアザー・カルチャーなのですね。





教育というと何でも学校に預ければいい、学校に行かせれば先生が面倒を見てくれるという強い観念が親の方にあるとしたらそれは間違いです。

日本人としてのアイデンティティを教えながら偏狭にあまりナショナリスティックな教育をすることを避ける意味でも、相手には相手の文化があるのだというその異文化理解を幼少のうちから教えることが大事ではないかと思えます。それからもう1つは情操教育だと思うのです。今小中学校はともかく中学高校では、今までは受験競争が激しかったこともあって音楽の先生、図工の先生は何となく隅っこに置かれている。やはり小中学校こそ音楽や図工が大いに行われるべきです。私は源池小学校に行き育てられ、そして清水中学校でしたが、非常に松本の学校に感謝しています。そういう情操教育を思い切ってやらせて、自分もやりましたし音楽の先生も図工の先生、全部の先生が非常に熱心でした。ところが受験に関係ないものだから音楽や図工がほとんどネグレクトされているという今日の日本の教育。

教育改革と日本の大学

そういう意味では初等中等教育を根本的に見直す必要があるのではないかと。初等中等教育を見直すからには若干手前みそに

なりますが、その前の幼児教育が大切です。文部科学省の中央教育審議会あたりでも何かあると今度は厚生労働省の人を呼んできて双方の合意がないと何も決まらないというのです。つまり幼稚園は文科省の管轄ですが、保育園は厚生労働省、そしてその予算をどうするかという話ばかりです。肝心の幼児教育の中身については私の知る限りほとんど議論されていない。問題は中身なのです。

従ってその点では鈴木鎮一先生は大変先見の明があったと思います。鈴木先生は幼児教育こそ一番大事だと、これを大いに重視してほしいということを言っています。つまり就学前の教育がほとんどネグレクトされてきた。しかもその幼児教育の場合もそうなのですが、就学前の教育というのはまず第一に家庭なのです。家庭教育がいかに大事か、お父さんお母さん方がしっかりすることがいかに大事か、その辺りも日本の教育は非常にある意味誤っているような気がします。教育というと何でも学校に預ければいいのだと、学校にさえ行かせれば学校が面倒を見てくれるという強い観念が親の方に

もあるとしたらそれは間違いです。自分の子どもを家庭においてもきちんと躾けることがいかに大切かを改めて認識しない限り、教育のファンダメンタルの基盤的な部分が非常に内容の薄いものになってしまい、後でいくら知識を積み上げてもそれでは遅いということになるのです。そこが教育の原点で、次が幼稚園や保育園です。

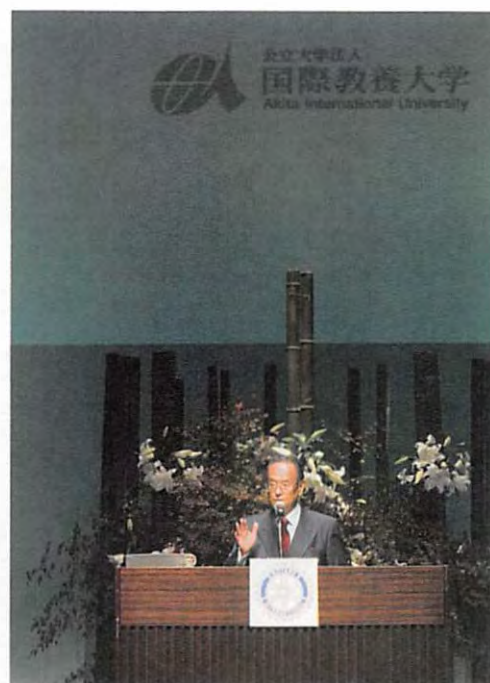
私自身も3年間松本幼稚園で本当にいい教育を受けていただきました。なんとその時の寒い日に私をオーバーに包んでくださった杉浦先生がまだご健在でして、この間もお会いできてとてもうれしかった。そういう信州の教育が非常に素晴らしかったのですが、最近の長野県の教育は秋田などに比べると少し立ち遅れたのではないかと懸念を持っています。この間も同級会の時に村井知事に申し上げたばかりですが、秋田県は3年連続小中学校の学力テストが全国トップでした。これは単なる偶然ではなくて地方に行けば行くほど秋田市より県南や県北などの田舎の方がいいのです。それはもちろんあまりテレビを見ないとか塾がない、しかし地域の



厳しいプロセスを通ってきた人と そうでない人との間には大きな 差が出てくるのではないか。

お祭りには子ども達みんなが参与する、一種のローカルコミュニティ、古き良き日本が生きているのです。子どもの心理が非常に安定しています。そして親と一緒に必ず夕食、特に朝食も食べます。これらの要素が積み重なって秋田の教育は非常にファンダメンタルズが強いと思うのです。そういう意味では幼児教育、就学前教育、その前の家庭教育、それから今度は小中の教育、そして問題は高等教育です。高等教育といえますと日本の大学、大学院。今、大学の数はどのくらいあると思いますか。四年制大学だけで750以上ありますが、このところ毎年のようにまだ増えています。国公立大学でさえ少子化で定員不足、学生が集まらないところがあります。ですから3月31日に入試係が一生懸命電話をかけて補欠入学を頼む。しかも大学を出てどれだけプラスアルファというか知的な価値が付いたかという、先述したように英語を10年間大学まで学んでもそれが使えないという人達をたくさん輩出している。そこに大きな問題があります。大学院もそうですが、先生と一緒にちょっとセミナーをやって論文

を書けば学位がもらえる。大学院は理系などの場合はリサーチ中心で良いと思うのですが、特に文系、人文社会科学の場合には徹底的な教育のプロセス、ティーチングやコースワークが日本の大学院の場合、とても安易なのです。私の人生にとって一番の試練であり、教員としての自分を育ててくれたのはカリフォルニア大学サンディエゴ校の大学院の教授として1年間毎週3時間ぶっ続けで英語で授業を行ったわけですが、これは大変な試練でした。もうへとへとになって終わるとすぐまた次の週の準備をする。学生は絶対に遅刻なんてしません。カリフォルニア大学はバークレー校が最上位ですがサンディエゴ校でもそこだけで10人ぐらいノーベル賞が出ている。カリフォルニア大学システムとしてはUCバークレイからは数十人のノーベル賞学者が出ています。その次はUCサンディエゴ、それからUCLA、ロサンゼルスです。あるいはUCデービスあたりが続いてくるのですが、それは大変な勉強をしています。そういう厳しいプロセスを通ってきた人とそうでない人との間には大きな差が出てくるのではないか。



ですからこれからのグローバル化の時代は少なくともMAとかPh.D.は持ってないと国連の職員などでも通用しません。日本は今までは例えば東大法学部を出て早く外交官になれば名譽だったが何の学位も持っていないわけで、国連にしても国際機関にしてもみんな学位を取得しています。

国際教養大学の挑戦

そういう意味で私の大学の最近の状況をお話しさせていただいて、ご参考に供したいと思います。国際教養大学は2004年に開学した非常に新しい大学です。これは全国初の公立大学法人として開学しました。学生数は現在1学年定員150名になりましたが最初は100名という少数精鋭の大学でした。全都道府県から沖縄あるいは九州エリアからも学生が来ています。入試倍率は現在でも10.7倍、



留学生が非常に多く、1学年129名の交換留学生と普通の留学生もいます。教員は半分が外国人。学長として一番心配した就職が大変良く、企業がわざわざ秋田まで来て就職説明会を開いたり、その場で採用を決めてくれるようなこともあります。去年からグローバル・コミュニケーション実践研究科という大学院をつくりました。日本から外国の大学院に行く場合には書類審査ですが、日本に留学するときには来日し研究生になり、それぞれの大学の試験を受けるのです。留学生にとっては非常に壁が厚く、グローバルスタンダードから書類審査の代わりに推薦状や英語力を示すTOEFLのスコアの提示をきちんとさせています。インターナショナル・リベラル・アーツ先述した教養教育がいかに重要か、日本の大学はほとんど教養教育をやらずに1年

生から小さな専門課程に入れてしましますが、自分がそこに合わなければもう1回受験し直さなければいけないということがないようにして、新しい理念を掲げています。グローバル化の時代における外国語、特に英語も卓越になるばかりか、中国語や韓国語、ロシア語やモンゴル語なども入っています。図書館が24時間開いていますから寮に住む学生はいつでも利用できます。国際教養大学ではすべての授業を英語でやっていますが、日本にそういう大学が1つぐらいあってもいい。日本には短大も入れると1,250という膨大な数の大学があるのですが、みんな同じような大学ばかりで、国際という名が付いていても1人の留学生もいない大学もある。英語を学ぶのではなくて英語で学び英語で考える大学。入学するとすぐにTOEFLの点数でクラス分けを

し、能力別の教育をします。評定平均値を活用します。つまり成績管理をきちんとするということ。それに少人数教育。そのあいだに英語の集中課程が終わりTOEFLが550点をクリアすると外国留学に1年間行く、それも124単位という卒業単位の4分の1を提携校で取得する。これも日本ではほかにはないと思います。今93の世界トップクラスの大学と提携してまして、こちらから学生を1人送れば向こうから2人受け入れ、授業料は相互免除です。アメリカやイギリスは非常に授業料が高く年間250万から300万です。それを53万5,800円という公立大学の安い授業料で留学できる。そのためには事前のカリキュラムマッチングをしますし、カリキュラムにはインターナショナル・コードが付いています。100番台は入門的な授業、400番台はかなり高度で応用的な授業であるなど、相手の提携校はそれで分かるのです。日本ではインターナショナル・コードを付けている大学はまだないと思います。従ってキャンパスは常に異文化空間であり、全寮制で1年次は全員がキャンパスに住むことができます。



英語を学ぶのではなく英語で学び英語で考える、
日本にそういう大学が1つぐらいあってもいい。

長野県からは現在20名。その1人は旧川上村で、私が松本予備校でPRをした時に出てきてくれ、UCデビスに留学し、農業を本格的にやろうという非常に優秀な学生です。

全体的には長野県も秋田県もそうなのですが進学なら東京へ出たいという進学文化を変えていただいて、とにかくここに来れば非常にグローバルな学びができるということをPRさせていたっています。社会貢献は信州大学でもやっていると思いますが、国際教養大学は国際貢献も1つ大きな柱にしています。この間もAERAの特集記事で、不況でも就職に強い大学のトップに、地方でも就職先が全国区、就職率99.1%、国際教養大学秋田と出ています。国立大学、公立大学の入試の前期後期日程には法的規制はなく、一種の囲い込みなので、我々は最初から

離脱して独自の日程で入試を行っています。若干朝日新聞社の大学ランキングを紹介させていただきますと、教育分野で学長からの評価ですと今年は7位、東大は18位ですから教育分野としては国際教養大学の方が評価が高くトップ、留学生の派遣数も日本一だそうです。小規模大学の中ではICU、国際基督教大学に次いでランクされています。リサーチ研究大学ではないものですから総合評価では14位ですけども、九州大学やいわゆる旧帝国大学よりもかなり高くなっています。

私は以上のような大学を試験的につくっております。

是非一度私たちの大学を見に来てください。

本日はお招きいただきまして大変ありがとうございました。

■中嶋嶺雄先生講演の内容を要約し
講師の承諾のもとに掲載させていただきます。

【文責:松本西南ロータリークラブ】



国際教養大学理事長・学長
(松本ロータリークラブ会員)

中嶋 嶺雄氏 プロフィール

国際社会学者、公立大学法人 国際教養大学理事長・学長。社団法人 才能教育研究会会長。松本深志高校同窓会会長。1936年長野県松本市生まれ。1947年松本音楽院(鈴木鎮一教室)入学。1965年東京大学大学院社会学研究科修了。東京大学社会学博士。東京外国語大学長、国立大学協会副会長、アジア大平洋大学交流機構(UMAP)国際事務総長、財団法人 大学セミナー・ハウス理事長、文部科学省中央教育審議会委員(大学院部会長・外国語専門部会主査)、内閣教育再生会議有識者委員、オーストラリア国立大学、バリ政治学院、カリフォルニア大学サンディエゴ校大学院の客員教授などを歴任。平成15年度「正論大賞」受賞。『現代中国論』(青木書店、1964年)、『北京烈烈』(筑摩書房、1981年(サントリー学芸賞受賞))、『国際関係論』(中公新書、1992年)、『21世紀の大学』(論創社、2004年)など著書多数。

主たる著書





国際ロータリー第2600地区
2009～2010年度

地区大会報告書

2009

10.17 sat 18 sun

ホストクラブ
松本西南ロータリークラブ

DISTRICT CONFERENCE REPORT